

聖書：創世記 35：1～29

説教題：ベテルに上り

日時：2024年4月14日（朝拝）

前の 34 章でヤコブの家族に思わぬ災いが降りかかりました。シェケムにとどまっている間に娘のディナがこの町の男に辱しめられるという事件が発生しました。それだけでもショックなのに、これに怒った兄たちが、この町の住民と契約を結ぶように見せかけて、すべての男たちに割礼を受けさせ、彼らの傷がちょうど痛んでいる頃を見計らって皆殺しにするという暴挙に出ました。ヤコブは頭を抱えて息子たちに言います。これでは周りの住民に憎まれて我々は根絶やしにされてしまうと。これからどうやって生きて行ったら良いのか。果たして生き延びられるのか。恐れて身動きが取れなくなっているヤコブの姿がありました。

そんな中、35 章 1 節に素晴らしい言葉が記されます。神はヤコブに言われました。「立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。」本来ヤコブはこの地に戻って来たら、まずベテルへと向かうべきだったと考えられます。ベテルはヤコブが約束の地から出て行く時、神がご自身を現してくださった場所です。ヤコブはそこで誓願を立て、心に大きな励ましを受けて遠い国パダン・アラムへと出て行きました。そしてその異国の地で 20 年過ごした後、神がヤコブに 31 章 13 節で言われました。「わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。」ところがカナン之地に戻って来たヤコブはベテルに直行しませんでした。兄エサウとの和解を果たして気が緩んだせい、スコテとシェケムで相当の期間（10 年前後）過ごしたと考えられます。その間に 34 章の事件が生じました。もっと早くベテルに向かってさえいれば、・・・と悔やまれるところです。

そんなヤコブに神が語りかけてくださいました。ここに私たちの救いはただ神から来ることが示されています。主導権を取って導いておられるのは神です。本来、自らの怠慢と妥協によって災いを招いたヤコブとその家族はシェケムでボロボロとなり、ここで一族の運命が終わりとなってもおかしくありませんでした。しかし神が語りかけて、導いてくださいました。「立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。」

い」と。この言葉を受けてヤコブは立ち上がります。どうしたら良いか分からず、座り込んでいた彼は、この神の言葉を受けて立って行きます。私たちの信仰生活はこのように働きかけてくださる神の恵みによって成り立っています。

ヤコブは主の導きを受けて応答します。2 節で彼は自分の家族と自分と一緒にいるすべての者に言います。「あなたがたの中にある異国の神々を取り除きなさい」と。私たちはこれを読んで「え？彼らは偶像を隠し持っていたの？ヤコブもそれを知らながら今まで許容していたの？」と驚くかもしれません。そう言えば 31 章ではラケルがラバンの家からテラフィムという偶像の神を持ち出したことが記されていました。またスコテとシェケムで長く生活する間に、気が緩んだヤコブの下、彼の家族やしもべたちの中には、この地の神々に心を惹かれ、それらを隠し持つようになった者たちもいたのでしょう。ヤコブはその異国の神々を取り除け！と言います。そしてその悔い改めの見える現れとして身をきよめ、衣を着替えよと言います。そして 3 節で「私たちは立って、ベテルに上って行こう。私はそこに、苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でともにいてくださった神に、祭壇を築こう」と言います。ヤコブは今回の神の働きかけを受けて改めて思ったのです。神はこれまでの苦難の日もずっと私とともにいてくださった。特にパダン・アラムでの苦しい生活は自分の罪が引き起こしたものでした。しかし神は私が歩んだ道でいつもともにいてくださった。そして今もこうして支えてくださっている。その神に感謝の礼拝をささげるために上って行こう！と言います。するとヤコブとともにいた者たちは、すべての異国の神々と、耳につけていた耳輪をヤコブに渡しました。耳輪は何らかの意味で偶像礼拝と関係していたと思われる。それらをヤコブは地面の下に埋めます。それらを取り出すことがないよう、それらと決別するためです。ヤコブはこうして主なる神のみに信頼し、この方に献身する姿勢を明らかにしました。この献身は神の恵みが引き出したことを私たちは良く心に留めておくべきであると思います。

すると「神からの恐怖が周りの町々に下ったので、だれもヤコブの息子たちを追わなかった」と 5 節に記されます。ヤコブは前の章の最後で周りの住民から攻撃されることを恐れていましたが、神に信頼し、神に自らをささげて歩むなら、そのような心配は無用であるということです。そうしてついにヤコブはルズ、すなわちベテルに来ました。そこに祭壇を築き、その場所をエル・ベテルすなわちベテルの神と呼んで、新しい思いで神を礼拝しました。こうしてヤコブがベテルに戻って来たことによって

ヤコブ物語は一つの大きなプログラムを終えたこととなります。神は 28 章 15 節でヤコブに、「わたしはあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る」と約束していただきましたが、その通り、神はヤコブを守り、このベテルまで連れ帰らせてくださいました。神の真実こそがここでたたえられるべきであると思います。

8 節にはそのベテルで、リベカの乳母デボラが死んだことが記されます。リベカの出産と養育を手伝った婦人ですから、かなりの高齢だったと思われます。なぜこの時、ヤコブと一緒にいたのかは良く分かりません。その彼女が死にました。これは神の一つのプログラムが終了したこととセットで一つの時代が終わったことを象徴する出来事でした。またこれはこの後、連続する死去の予兆ともなることでした。

9 節以降にはヤコブがベテルで受けた祝福が述べられています。9 節の「ヤコブがパダン・アラムから帰って来たとき」という言い方も、このベテルこそヤコブが帰って来るべきところあったことを暗示するように思います。ここに神がくださった祝福が二つ述べられています。一つはヤコブの名がイスラエルとなることについてです。すでに見た 32 章の真夜中の神との格闘において、この名は彼に与えられました。その新しい名がもう一度確認されています。この名が示す祝福に生きるようにと神は招かれました。もう一つは 11~12 節にあるアブラハム契約の再確認また更新です。イサクはヤコブをパダン・アラムに送り出す際、28 章 3~4 節で次のように言いましたが、これを引き継いだものと言えます。28 章 3~4 節：「全能の神がおまえを祝福し、多くの子を与え、おまえを増やしてくださるように。そして、おまえが多くの民の群れとなるように。神がアブラハムの祝福をおまえに、すなわち、おまえと、おまえとともにいるおまえの子孫に与え、神がアブラハムに下さった地、おまえが今寄留しているこの地を継がせてくださるように。」 アブラハム、イサクと受け継がれて来た神の約束は、今後ヤコブに引き継がれることを神が改めて確証していただきました。

さて、このような祝福を受けたヤコブには良いことばかりが続くかと思いきや、その反対の不幸ばかりが連続します。一つ目は愛する妻ラケルの死です。彼女はもう一人の子を出産します。彼女は以前、ヨセフを出産した時、「主が男の子を、もう一人、私に加えてくださるように」と 30 章 24 節で願いました。その通り、男の子を身ごもりました。しかし難産となり、彼女はここで命を落とすこととなります。ラケルは男の子に「私の苦しみの子」という意味のベン・オニと名づけますが、ヤコブはベニヤ

ミン、「右手の子」と名づけました。「右」は力とか誉れ、優れた者といった良い意味を持ちます。ラケルはこうしてベツレヘムへの道に葬られます。ラケルはヤコブの最愛の妻でした。ヤコブにとっては人間的に最大の損失だったでしょう。

さらに長男のルベンが、そばめビルハのところに行って彼女と寝たという事件が発生します。これはルベンの性的欲求から出たものではなく、直前のラケルの死去と関係するだろうと多くの注解者はコメントしています。ルベンは長男でレアの子、愛されない妻の子でした。そして今、ラケルが死にました。その結果、ヤコブがラケルへの愛によって、そのそばめビルハをレアよりも上位に持って来ることがないように、ビルハの地位を下げようとして行われた行為だっただろうと学者たちは言います。また父の妻と寝ることは父を辱めることであり、父の上に自分が権威を持っていることを主張するものです。後にアブシャロムがダビデに対して同じようなことをします。そのように自分こそ今やこの家の第一位を占める者であるという主張を彼がこれによって行った可能性もあります。これに関して 22 節に「イスラエルはこのことを聞いた」という言葉だけで終わっています。なぜそれ以上、言葉がないのか。それは著者も呆れて、恥じて、詳細を述べる気になれなかったということではないかと述べる人もいます。しかし後に創世記 49 章に記されるヤコブの遺言のような預言において、ルベンは厳しい言葉を受けることとなります。彼はこの行為によって長子の権利を失うこととなります。

このような流れの中で 22 節後半からヤコブの 12 人の子のリストが載せられています。これはベニヤミンが今、加えられたからでもあるでしょう。リストの順序はヤコブの妻になった順序のようです。レア、ラケル、ビルハ、ジルパの順です。26 節に「これらはパダン・アラムで生まれたヤコブの子である」とあります。ベニヤミンは例外ですが、たった今述べられたばかりで読者は了解していることですので、細かい言い方はしなかったのでしょう。パダン・アラムでの生活を通して、また今ここでもう一人を加えて合計 12 人となりました。ここに神の真実が証しされています。そしてこれがラケルの死、またルベンの罪の後に記されていることにも意味があると思われる。この世にあって私たちに死別の悲しみや思わぬ罪の出来事などが起こり得ます。それらはある意味で避けられません。しかしそれらを越えて神の約束は静かに、力強く進展して行くということです。この 12 人の子が、この後イスラエル 12 部族の祖となって神の約束は大きく進展して行くこととなります。

最後にイサクの死が記されます。これも一時代の終わりを記すものです。実際、ここは 25 章 19 節から始まった「イサクの歴史」の最後の部分に当たります。イサクはアブラハムに次ぐ二代の族長として歩んで来ました。29 節にイサクは年老いて「満ち足り」とあります。アブラハムから受け継いだ多くの約束はまだ実現していませんでしたが、神を信じ、約束を見つめて歩んだイサクの生涯は「満ち足りて」という言葉で総括されています。アブラハムと同じです。イサクも父アブラハムと同様、神を信じて十分に満足し、地上の生涯を走り終え、天にある民に加えられました。その彼を息子のエサウとヤコブが葬りました。こうして一つの時代は終わりました。しかし神の約束はなお続きます。

以上、ヤコブがついにベテルに戻り、これをもって神の一つの大きなプログラムが終了しました。またこれは一つの時代の終わりとしてセットになっていて、そのために色々なことがまとめて今日の章に記されました。最後に今日見たことから二つのことをもう一度心に留めて終わりたいと思います。

その一つは今日の章は神の恵みから始まったということです。神のイニシアティブが強調されました。それを受けてヤコブが応答し、ベテルへと上り、改めて祝福を受けました。ですから私たちも神からすべてのことが始まるという順序が大切です。私たちからは良いものは始まりません。私たちは 34 章のように自分の罪と恐れと妥協の中に座り込むだけのような者です。そんな私たちを立ち上がらせてくださるのは神です。私たちを感謝と献身の歩みへと導いてくださるのは神です。ですから私たちは神に望みを置き、神の御言葉に聞くことをいつも大切にしたいと思います。神が私たちに働いてくださる第一の手段は御言葉です。その御言葉を通して神がくださるメッセージと励ましによって、新しい歩み、悔い改めの歩み、献身の歩みへと導かれ、その先に用意されているさらなる祝福にあずかって行く者たちとされたいと思います。

もう一つは神の祝福を受けて歩んでもこの世では色々な悲しみや罪は避けられないということです。この世は天国ではなく、そのようなことはなお起こります。ですから私たちはどんなに悲しいことが起こっても必要以上に驚くべきではありません。しかし慰めは、そんな中でも忠実な神によって神の約束は進展して行くということです。神の真実な働きを示す 12 人のリストが今日の箇所がありました。12 という数字

を見て素晴らしく思いますが、個人個人の名を見るとどうでしょうか。二人目と三人目のシメオンとレビは、前の章で暴虐を行った者たちです。また筆頭者のルベンも父の妻と寝た人です。こんな彼らでは今後一体どうなることでしょうか。しかしここから神は導いて行かれます。神は 11 節でヤコブから「国民の群れ」が出ると言われました。これは「諸国民の集い」という表現で、この集いとは集会、そして教会と訳され得る言葉です。ここにやがて全世界の多くの国民からなる神の民、神の教会のことが暗示されています。また同じ節で「王たちがあなたの腰から生まれ出る」と言われました。これはヤコブの家系から将来王たちが出るということです。具体的にはサムエル記、また列王記に記される王たちの時代がやがて来ることを預言しているものです。そしてその王たちはまことの王イエス・キリストの到来を指し示すものとなります。ここまでヤコブ物語を見て来ていつも思うのは、このヤコブの家を通して世界に対する神の救いの約束が実現していくとは人間的には到底思えないということです。12 人のリストの筆頭者三人を見てもそうです。しかし彼らの弱さや罪にもかかわらず、神は約束を進展させ、実現して行かれます。希望がないように思われる者たちを用いてご自身のわざをなして行かれます。ですから私たちもこの恵みの神にこそ望みを置いて従って行きたいと思えます。神が主導し、また恵みによって導いてくださいます。私たちは神が語りかけてくださる言葉に耳を澄まして聞き、神が与えてくださる力と励ましによって感謝と悔い改めと献身の新しい歩みへ導かれたいと思えます。そして弱い者を通してみわざを行われる神によって、神の素晴らしい目的とご計画が実現するために用いられる者たちとされて行きたいと願います。